

ここでは訳語として使われている「操作的定義」を使っていますが、その後、「作業上の定義」のほうがわかりやすいと考え、今は「作業上の定義」と私は行っています。operationは「作業」とも訳しますので。

研究所だより

第22号

社会福祉法人日本保育協会 保育科学研究所

はじめに（研究所事務局から）

今回のテーマを、あえて「保育者のための研究法入門」として執筆いただいた。いろいろな角度から書いていただいたことで、保育の専門性とは何かをあらためて考えるきっかけが出来たのではないだろうか。

「技術」ではなく「探究の姿勢」こそが子ども・保育についての研究のエネルギーになると思うし、それから少しずつ研究の「作法」を身に付けていけばいいと思う。今後とも保育科学研究所の役割として、保育者のための保育研究の入門編についてわかりやすくお伝えしていきたい。

さて、定例の「保育科学研究所学術集会」は第6回をむかえ、昨年同様に千代田区麴町の全国町村議員会館で、9月2日(金)・3日(土)の日程で開催される。

「これからの保育・幼児教育と子育てを考える」をテーマに平成27年度研究6件と国庫補助研究2件の発表、講演5件、さらにシンポジウム「保育・幼児教育研究の最新の動向と親子関係を考える」をテーマとしてシンポジウムを実施する。(本号裏表紙に概要掲載。詳細は月刊誌「保育界」7月号の付録と日本保育協会ホームページ・保育科学研究所を参照されたい)

もくじ

1. はじめに	1
2. 巻頭言「保育研究の現代的意義」..... 大谷 泰夫	2
—特集：保育研究のために—保育者のための研究法入門—	
3. 身近なテーマで話し合ってみよう..... 澤田 夏彦	3
4. 現場の声を形にする保育研究..... 高木早智子	4
5. 研究を科学にするのは、最初の「定義」..... 掛札 逸美	5
6. 対照グループの発想—保育者のための研究法入門... 内田 伸子	6
7. 幼保小教育交流ブロック別合同研究..... 森田 倫代	8
8. 保育が好き、保育を楽しんでいるからこそ、 保育研究を活用しよう！..... 坂本喜一郎	9
9. 保育者こそ研究を..... 高橋 智宏	10
10. 知的好奇心を大切にしつつ複眼的視点をもって..... 荻須 隆雄	12
11. 保育研究のために..... 大方 美香	13
12. 保育の質と専門性のエビデンス..... 日吉 輝幸	14

現場の保育者が長時間保育についてどう感じているかを調べてみることから始めてみよう、と方向性が定まったのである。しかし、「長時間保育をどう思うか」と会員園の保育者に個別のインタビューや自由記述のアンケートを行ってみても、それは個人の声の集まりでしかなく、「保育業界の労働時間に対する不満」として社会に受け取られかねない。そこで、心理学博士の掛札逸美先生の協力を得て、社会心理学の調査法をもとに保育者の現場感覚の数値化に取り組むことになった。

現在、この調査研究は続行中である。結果がどう出るのかはまだわからないが、自分たちの声を形にする一歩を踏み出した。現場の現場による現場のための科学的な研究になるよう、鋭意努力していきたい。現場にいる保育者が保育研究を行う、言葉で聞くと敷居が高く、尻込みしてしまう保育者も多いのではないだろうか。けれども、自分たちの声が社会に届くことで、子ども達や保護者のために変えられることがあるのではないか。そのための一歩を、多くの現場で共に踏み出してほしいと願うばかりである。

(親心を育む会 事務局
深谷市・花園第二保育園園長)

研究を科学にするのは、 最初の「定義」

掛札 逸美

なぜ、「研究」をするのでしょうか？ たとえば、こういう時です。

- 1) 子どもの間にみられるAという特徴と、Bという特徴に関係があるだろうか？ (相関関係)

- 2) 子どもに最近よくみられるAという特徴の原因になっているのはなんだろうか？ Bという要因だろうか？ (因果関係)

- 3) 子どもたちにAという働きかけをすると、Bという行動に変化が起こるだろうか？ (因果関係+介入効果)

「私が気づいたことは、この子(たち)だからではないはず。もっと一般的に言えるはず」や「こういう働きかけには効果があるはず」という気持ちが、研究のひとつの基本です。これ以外に、毎年集めているデータを分析したり、他の目的で集めたデータを別の視点で分析したりもします。こちらは、「データからなにかみつかるかな？」というタイプの研究で、その結果から1~3のような研究につなげていきます。

1~3のように、ことごらの間の関係を知りたい時、まず最も大切なのはAやB(例：月齢、性格、特徴、できごと、働きかけ方などなど、「測りたいこと」なんでも!)を明確に定義することです。たとえば、「~の働きかけをしたら、子ども同士の関わりが増えた」というのであれば、「働きかけの具体的な内容は~です」「『関わり』とは~を指します」「関わりを~のようにして数えます」と定義します。

この定義の部分が明確かつ的確にできれば、(結果がどうであれ)研究は成功です。なぜなら、定義しなければ、おとなによって「働きかけ」が変わり、観察する「関わり」が変わり、数え方も変わってしまうからです。そして、定義をしておけば、研究結果を読んで「おもしろいな」と思った別の保育園が同じように取り組むことができるからです。他の園でも「関わりが増えた」という結果が得られれば、効果を一般化する一歩になります^(*)。他の園で「関わりが増えなかった」という結果が得られれば、

「最初の園とは何が違うのだろう」という研究につながります。

包括的な定義をする必要はありません。「この研究では、～と定義します」と明記できればいいのです(※※)。もちろん、勝手に定義するよりは、これまでの研究が使っている定義をそのまま、または自分たちの研究に合うように変えたほうがよいでしょう(変えた時は、変えた理由と、どのように変えたのかも書きます)。ただし、性格や成長など既存の尺度の日本語版がある場合は、そちらを使うべきです。

研究が「科学的」であるかどうかは、このプロセスが決めます。「科学」の基本は、「妥当性 (validity)」と「信頼性／再現性 (reliability)」があること。「妥当性」とは「測る、観察する、と言っているものを測っているか」(「関わりを測る」のであれば「関わり」を確かに測っているか)、「信頼性／再現性」とは「その方法を別の人たちが同じように実施できるか」です。物理学や生物学の場合、誰が実験しても同じ研究結果を得られることが信頼性／再現性になりますが、行動や心理の分野では、研究対象が違えば結果が(多少)違うのは当然です。そのため、研究方法そのものの信頼性／再現性が重要になります。

自分では研究をしないとしても、妥当性、信頼性／再現性という視点を持っていると、さまざまな研究の「科学レベル」を考えることができます。

※数学や物理学のような限られた分野を除き、現象や関係が「証明された」と言えることはありません。特に、心やからだ、行動を対象とした研究では、すべての要因を入れて検討することは不可能だからです。ただし、類似の研究が数多くあれば、結果をまとめて計算し、より厳密な

結果を述べることはできます(メタ分析)。この場合、発表されていない研究論文等も分析に含む必要があります。仮説と異なる結果や統計学的に有意ではない結果が得られた場合、発表されないことが多いからです。

※※これを「操作的定義 (operational definition)」と呼びます。たとえば、「子どもとは何歳までか」を考えだしたらきりがありません。「この研究では×歳までを指します。理由は～」が操作的定義です。

(NPO法人保育の安全研究・
教育センター代表／心理学博士)

対照グループの発想

一 保育者のための研究法入門

内田 伸子

一般的に、ある対象を「わかる」とか「知る」ということは、他人にコミュニケーションできるような形で対象を捉えていることを意味しています。保育現場で行う研究も、哲学や方法論なしには一人前の研究とは言えないでしょう。“研究するには、自分なりの「ヒネリ」がいる。これまでの研究の流れを勉強し、総括し、そこで欠けている点を発見し、テーマとする”というのは、嘘なのです。研究はこれまでの諸々の研究と自分なりの問題関心との相互作用から生まれるのです。研究というからには、それまでの研究になかったような、何か新しい「ヒネリ」が必要です。以下の5点に配慮して研究に着手してください。

(1) 研究の必要性や研究目的の設定；調査・研究の必要性を裏付ける直観や印象